

5人の絆

タイガース完全復活

味のある演技を見せる俳優・岸部一徳。その彼がタイガースの「サリー」として、ベースやコーラスを担当していたことを知らない若者も多いだろう。1971年の解散後は、沢田研二とともに新バンド、PYGを結成した。テンプターズの萩

岸部一徳



藤原健撮影

「二世を風靡」俳優の糧に

原健一やスパイダースの井上堯之も参加。グループサウンズのスターが集合し、「すごいグループができるんじゃないかな」と思った。しかし、活動は軌道に乗らず、PYGは短命に終わった。その後は井上堯之バンドの一員として、沢田のバックを務めた。ソロ歌手としても沢田は順調にヒットを飛ばしていたが、岸部はやがてミュージシャ

ンをやめてしまう。ベースの腕前は周囲から評価されていたが、本人の考え方は違った。もともと遊び仲間が集まって、「音楽をやったら、もてるかな」と楽器を始めた。それがタイガースという売れっ子バンドに成長していった。ベースを弾いたのも、ほかのメンバーがやらない「余っている楽器」だったからだという。

「だから音楽的な勉強をあまりしていない。勢いでやってきた。ところが(井上バンドで)映画やドラマの音楽もやりだすと、譜面を読む力など、いろいろな能力が必要になってくる。そこで、自分は勉強したか、努力したか、才能があるか、そんなことを考え出した」。その結果、「何の未練もなくやめられた。それで俳優の方に、そして今日に至る」と淡々と語る。

それでも、タイガースでの経験は、役者になってからも糧になった。「二世を風靡した人気グループにいたのは大きい。そうでなかったら俳優としても、脚光を浴びたいという欲が出たと思う。そういうことは考えなくて済んだ。自分らしく、と思っただけでやってこられた」。一度はやめた音楽だが「メンバーが『やろう』となったら、やらなさいといけないと思っただけですよ」という。今回の完全復活でも「(加橋)かつみが出るなら、自分も出なきゃいけない」。若い頃、タイガースでは「もめると止める。そういう役割」だったと振り返る。岸部は今も責任感の強いまとめ役を担っているに違いない。(おわり)

◇この連載は、文化部 清川仁、桜井学が担当しました。

文化 Culture